

# 適応ストラテジーとしての擬制親族

——ブラジル日本移民における天理教集団の事例——

前 山 隆

## 1 社会変動と擬制親族

社会学・人類学において扱う親族 kinship の関係は社会的な関係であって、それは血縁的・生物学的関係から厳密に区別されなければならない。親族がこのように社会的に意味を与えられたという範囲での関係であるから、それへの意味の与えられ方は、社会の変動にしたがって不断に姿を変えている。人間とは対人関係を操作して生きる存在 manipulator of relationships である<sup>1)</sup>。それぞれの状況にしたがって選択を行ない、親族をも含めた人間関係について拡大解釈もし、縮小解釈もしている。しかし主として生物学的な血縁関係ならびに婚姻とに基盤をおいた親族的紐帯においては、その選択の範囲が構造的に大きな限定を受けている。

擬制親族 fictive kinship とは、以上のような生物学的血縁関係や婚姻に基礎をおいた親族・姻戚の関係ではなく、それとのアナロジーにおいて、より人為的に結ばれる準親族関係である。このような擬制親族関係は、もとより、すでに親族的・姻戚的に関係をもっている人々の間に、そういった関係とは別に結ばれることもありうる。擬制親族においては、その人工的・擬制的な性格上、変動する状況に応じた選択の範囲と柔軟性が元来の親族関係に比してはるかに大きいので、急激な社会変動下で新しい状況に自らを適応せしめていかなければならない人々に対して、きわめて有効な《適応ストラテジー adaptive strategy》を提供する場合がおおい。すくなくとも理論的には、われわれは、必要に応じて、必要な人間を、必要な数だけ選択し、擬制的な親族関係をその人々と結んである種の連帯に入ることが、できないわけではない。

擬制親族は、日本はもとより世界の各地で沉く行なわれている人間関係の型であり、家族的親族的な狭い人間関係の枠を外界に向かって拡大せしめ、《他人の世界》である外界を、親密な家族的・親族的原理によって自らにたぐり寄せていく作用をもつ。日本社会そのものが、天皇を家父長的頂点とする「家族的構成」をもっているという論も<sup>2)</sup>、擬制親族の立場から眺めることもできる。

擬制親族には、儀礼や契約にのっとった formal fictive kinship、たとえばヨーロッパやラテン・アメリカのカトリック教世界における compadrazgo の制度や日本のいわゆるやくざの親分乾分関係のごときものと、そのようなプロセスを経ない informal fictive kinship とに分けて見ることができる。またそれらの関係が、地位や階級のちがった人々の間に結ばれる場合と、同等の人々の間に成立する場合があり、それによって紐帯の性格が異なってくる。また人と超自然的存在との間に結ばれるものをも含めて考えることができよう。新旧大陸におけるカトリック教世界における compadrazgo 制を研究した Mintz と Wolf は、この擬制親族関係が、時代の状況に応じて、階級差のある個人間の庇護奉仕の関係として結ばれたり、

また同等の農民間の連帯関係に変貌したこと、状況に応じて結ばれる度合いに増減のあることを分析した<sup>3)</sup>。

天理教の教義においては、神（天理王命）は親神オヤガミと呼ばれ、〈コ〉たる人間の〈オヤ〉であり、創造主であり、また保護者でもある。また教祖中山ミキはオヤサマと呼ばれ、教祖と信者との関係はオヤコの関係になぞらえられている。さらに、布教するもの（すべての信者は同時に布教者でもあるのだが）とその指導下に新しく改宗するものとの間の関係もまた同様に、オヤとコとの関係として了解されている。これらを総合して擬制親族のひとつの形態として捉えることができる。

この小論において筆者は、ブラジルに渡った日本移民間の天理教徒たち（そのほとんどはブラジル移住後改宗したものである）が、社会変動下において、これらの天理教々義における〈オヤコの理〉に基いた擬制親族をどのように拡大解釈して、自らの変動する状況への適応のための戦略としていったかを略述する。

ただしここで断っておかなければならないことは、筆者は、1965年9月より2年間に亘ってブラジル日系マイノリティーに関する調査に参加し、殊に1966年9月より翌年3月までは生長の家教団の調査に従事したが、天理教に関する調査は組織的には行なっておらず、あくまでも生長の家に関する調査との関連において簡単なサーヴェイとして行なったに留まるということである。（なお筆者は1972年にも同様の簡単なサーヴェイを行なった。）したがってこの小論は、簡単なスケッチの域を出るものではないことを附記する必要がある。筆者はここにおいて、ブラジル天理教々団の全貌を記述する考えもなければ、その擬制親族の総合的分析を試みるのでもない。あくまでもその一面のみを考察してみるにすぎない。なお、ブラジルに渡った日本移民たちが出自社会から自らを切り離して異人種と異文化の支配する異国において生活を築いていかなければならないという新しい状況下で、移民間にどのようなインフォーマルな擬制親族が適応戦略として析出されたかについては別に筆者の考察がある<sup>4)</sup>。

## 2 ブラジル日本移民間の天理教

ブラジルへの日本人移住は1908年に始まったが、初めはハワイ・北米熱が高く、南米行きを希望する者は少なかった。第一次大戦によってヨーロッパからの移民がスムーズに來なくなるやブラジル政府は日本移民に力を入れ出し、また北米での排日運動が昂って1924年には日本移民に対して門戸を鎖すに及び、ようやくブラジルへの日本人の移住は活発化するに到った。第二次大戦の開始によって中絶するまでに約19万人が移住し、主としてコーヒー大農場の契約労働者として数年働いたのちに、借地農・独立自営農に転じ、1940年代以後急速に都市化が進行して広範囲な都市の職業に就くようになってきた。戦後移民は1952年に開始されたが、いわゆる神武景気という好景気によって1960年代初期に移住がほとんど杜絶するまでに約55,000人ほどが入国した。日本敗戦の混乱期をくぐり抜けて、1950年前後にほとんどのものが永住の肚を固めてしまうまでは、出稼ぎ意識と帰国心が強く、そのために一時の〈仮寓〉と見做していたブラジルの地における宗教的活動に関心を抱くものはごく少なかった。日系マイノリティーにおける宗教活動は1950年代以降にようやく活発化して來た<sup>5)</sup>。

ブラジルにおける天理教の歴史は1929年における信徒10家族の集団移住によって始まったといえよう。それ以前、一般移民のなかに混って約20名の信徒がばらばらに渡来している<sup>6)</sup>

が、かれらは特に伝道の意志はもたず、その活動にみるべきものはなかった。日露戦争・第一次大戦を経て顕著となってきたアジアにおける日本帝国の植民地主義を社会的背景とし、「七十五年経てば日本国中あらあらず、それから先は世界の隈から隈まで天理王命の名を流す」という、天理教が世界宗教となるべきオヤサマの予言を教理的背景として、天理教本部は1926年の教祖40年祭を契機として海外布教の気運を盛り上げるにいたった。しかし具体的には、その海外布教も海外に居住する日本人間の布教という域を出るものではなかった。つまり、日本資本主義・帝国主義の《海外発展》、それに従って《海外雄飛》と称して国を出て行った植民・移民、そしてそれら移植民者を追いかけていくつかの宗教団体は海外布教を企てたのである。したがってそれらの動きも、ほとんどは日本帝国の勢力範囲にとどまっていた。

1927年には天理教本部では海外伝道部を設けた。それに呼応して立った南海大教会は、和歌山県海外移住組合の南米移住計画案に基き、海外布教を目的とする移民をその信徒のなかから募集し、応募した10家族を、若干の訓練を施したのち、1929年にサンパウロ州チエテ移住地（現在の Pereira Barreto 郡内。これは開拓前線の未開地に自営独立農を直接日本から移入せしめるために設けられた計画移住地であり、ここに入った人々はふつうコーヒー農場での契約労働はやらなかった。）へ集団移住せしめた。

チエテ移住地はサンパウロ州の最奥の地で、すぐ隣りのマツ・グロソ州に接し、当時は処女林の中に拓かれた、現地人もあまり居住しない日本人のみの移住地であった。かれらはここで開拓農業に従事するかたわら、周辺の日本人農業者、同じ船で移民して来た者たちに対して、「ニオイガケ」（布教活動）をも行なった。それぞれが、個々に、合い間合い間に行なった伝道であった。翌1930年には小さな信者グループ「正明会」をつくり、その仲間でも小さな堀立小屋の礼拝堂をも建設した。1931年には大竹忠次郎（現在のブラジル伝道庁長）は移住地とサンパウロ市の中間に位し、交通の要地であるバウルー市に出て、そこで布教に専念することにした。ブラジルへの日本移民は1925年頃より急増し、大竹がバウルーへ出た1931年の頃にはほぼその最盛期を迎えていた。しかもコーヒーの過剰生産と世界恐慌のために、コーヒー栽培者である大土地所有者たち（ポルトガル系の伝統的支配者であり、かつてのドレイ所有者たち）は急激に没落をはじめており、同時に、将来のコーヒー栽培用に抑えていた奥地の広大な土地を細分して売却しだしていたので、移民たちにはようやく独立自営農となるための小規模な土地が入手可能となり、コーヒー大農場の未発達であったサンパウロ州西北部、ことにバウルーを起点とする地帯へ移民たちが蝟集して来ていた。約5,000家族の日本移民たちがこの地方に散在していて、日本人の最大の集団地であった。その中心地バウルーには日本領事館があり、週二回発行の邦字活字新聞があり、日本人商店・ホテルもあって、ようやく盛況を呈しはじめていた。このような状況に刺戟されて、大竹は布教に専従することに踏み切った。こうして1935年にはノロエステ教会が、翌1936年にはバウルー教会、パウリスタ教会、プロミッソン教会、ペナポリス教会、マリリア教会が本部より認可を受けた。これらすべての教会名は、それぞれ伝道の発祥地の地名に由来し、いずれも1930年代の有名な日本人集団地、しかも棉・コーヒーの小規模な自営農（自作または借地）たちの集団地の名を冠している。因にいえば、天理教においては、「教会」を設けるということは、その教会長が布教活動に専従することを意味し、教会長の生活については教会メンバーが責任を負わなければならない。

各地に教会と信者が増加してくるにつれ、各教会間の連絡と組織化への要求が昂り、1939年よりブラジルにおける統一組織の動きが起って来た。パウルーの大竹が中心となって、この年に教師会ブラジル分会、婦人会ブラジル部会が創立され、翌1940年にはブラジル青年会の創設をみた。1941年になって、これらの諸会組織が一字会ブラジル支部という形で統合され、ブラジルにおける天理教の教団機構は一応その基礎をかためた。当時ブラジルにおける教会数は9つであり、その内5教会がアルタ・パウリスタ地方、残りの4教会がノロエステ地方に位置していた、すべてパウルーを起点として西北へ走る二鉄道路線に沿った地帯にあった。パウルーはサンパウロの首都より約350km 西北方の内奥地にあり、当時唯一の交通機関であった鉄道で約10時間を要した。第2次大戦以前においては、サンパウロの首都圏における布教活動は皆無に等しく、信者もほとんどおらなかった。

こういった天理教の組織化は、もとより教団内部の要求により出来上って来たともみることが出来るが、また反面天皇制ファシズム下の帝国日本を背景としてブラジルの日本人社会に急速に昂って来た会組織化の動き、ことに青年団・処女会・日本人会・中央日本人会といった組織が領事館・移住会社といった日本官憲の出先機関を通じて神国日本の天皇にシンボリックに繋がり、その統制下に入る動きの一環をなしてもいたといえよう。もともと一字会というものの自体が、その名の示すとおり、日本本部で天理教教師養成学校（天理教校別科）の同窓会「よのもと」会として発足したものが政府の干渉により八紘一字に因んだ名に改められ、挙国一致運動の一環に繰り込まれたものであった。一方戦前の出稼ぎ移民たちは自らをブラジル社会の正常な一員であると考えようなことはなく、心理的には日本の社会構造に連らなると意識し、かれらの会組織もそのようなたたずまいをもっていた。

ブラジルの天理教が布教体制を一応整えた翌年には早くも太平洋には戦雲が漂い、ブラジルの日系人は集会を禁じられ、家庭外での日本語使用も許されず、日本人会・邦字新聞等も閉鎖をうけ、全面的な生活統制が加えられた。日米は開戦し、教会は閉鎖され、教会幹部は拘留された。そして人々の宗教活動は家庭礼拝に限られるにいたった。しかし、サンパウロ市をはじめ、各地で、戦時中の禁制下で、ほそぼそとながら隠密裡に小規模な祭礼のための集会は継続されていた。このような強い統制は一方では会活動を挫折せしめるが、他方では少数の人々の間に強力な連帯の意識——日本人としての ethnic identity と同信者間の擬制親族的な表象にもとづく religious identity——を次第に醸成せしめてもいった。

終戦後間もなく政治的な統制は一般に緩められ、天理教の活動もパウルー、サンパウロ市を中心に再開し、1950年以後は日本本部との交流も活発化し、翌1951年にパウルー市にブラジル伝道庁が開設されて今日の伝道活動の土台が固められた。戦後は日本の真柱、または重要幹部が幾度もブラジルを訪問し、一方ではブラジル伝道庁から若い本部留学生在が派遣され、あるいは信者たちがオヤサト「おちば」へ「帰る」団参が頻繁に組織されて、日本との交流は日増しに強く、教団としても発展を遂げている。

天理教においては、他の多くの日本宗教集団と同様、信者数を個人では数えずに、家族単位で数える傾向が強いので、各年次別に正確な数を把むことは困難である（表1参照）。戦前は組織も固まっていなかったもので、信者数を知る良い資料はない。1958年は対ブラジル日本移民の五十年祭に当り、サンパウロ日本文化協会を中心とした祭典委員会では「ブラジル日系人実態調査委員会」を設けて大がかりなセンサスを行なう他、多方面で史料づくりが行われたが、天理教でもブラジル伝道史を編纂して出版した<sup>7)</sup>ので、この年については正確な

表1 ブラジル天理教の発展

	信 者	教 会	布 教 所
1940	(不明)	9	—
1958	1944	19	26
1966	±4000	34	68
1972	±5000	43	123

備考) 1940年、1958年のデータは『天理教ブラジル伝道史』(1958年)による。1966年、1972年のは伝道庁幹部より筆者が直接聴取したものである。

数字が出ている。1966年末筆者が調査した段階では、信者数は約4,000人と推定され、1958年の1,944名に比して、大略倍増していた。1972年に筆者が再び簡単なサーヴェイを行なった時には、信者数は約5,000人と推定され、増加率はそれまでに比べてかなり衰えていた。一方、教会数と布教所数は増大していた。これを解釈すればつぎのようになる。すなわち、第一に、ブラジルの天理教は非日系人の間には入り込んではおらず、ほとんど完全に日系コロニア(コロニー)内部のものであり、他方では日本からの移住は1960年代でほぼ終息をみた。第二に、ブラジル生れの二、三世はカトリック的ブラジル世界の中で社会化を受け、言語的・文化的障害もあって、なかなか日本宗教になじんで来ない。移民間の布教はほぼ行く所まで行き、日系・非日系ブラジル人間布教は伸び悩んでいるといった現状である。移民たちはようやく老いはじめ、生活水準は向上し、日本へ墓参に帰国しがてら「おさづけ」を頂いて教会長としての資格なども得、晩年を布教などに専念する人々も殖えているので、信者数が伸びない割には教会数などが殖えている。

### 3 状況変化と適応ストラテジー

天理教は日本封建制下の幕藩体制解体期に芽生え、主として極めて閉鎖的な、mobility度の低い村落共同体を舞台に成長して来た宗教である。一方ではこういった体制に対する《世直し》の教義(これを論ずるのはこの小論のテーマではない)を育てたが、他方ではその教団組織とそれを支える教義は上記の閉鎖的・静的な社会の原理に根をおいていた。そのような教団と教義のあり方が極めて開放的な、mobility度の高い、動的な状況下にある社会(ブラジルのサンパウロを中心とする地帯はコーヒーの過剰生産と世界恐慌の下で、1930年以後このような状況に入ってきた)の中でどのように対処していかなければならなかったか。この点について、殊に擬制親族の面に焦点を合わせて考察してみる。

コーヒーの全盛時代には移民たちを契約労働者の地位に留めておく必要から、かれらが土地を購入して自作農となっていく道が組織的に阻まれていたし、大農場ではコーヒーの単一栽培に全力を注ぎ、労働者の食糧なども輸入品に頼る傾向が強く、国内市場は育たなかった。やがてコーヒー経済の行き詰まりと共に、一方では土地が開放されて農村には小農層を産み、国内市場は急激に伸びはじめ、各地に都市が勃興して来た。他方ではサンパウロ首都圏を中心に、コーヒーのもたらした資本が工業投資へと流れ、1930年以来急激に工業化が進み、サンパウロ首都圏へ向っての人口移動が飛躍的に展開しはじめた。

1925年からの10年間に集中的にサンパウロ州へ移住した日本移民はこのような激動下の社

会構造へ投げ込まれ、むしろその恩恵をもっともおおく受け取った移民であったといえよう。大雑把に言えば、まずサンパウロ州北部モジアナ方面のコーヒー大農場に契約労働者として到着した新移民たちはおそくとも数年後には西北部の小農地帯へ借地農・分益農・開拓農として大移動して行くのがふつうだったし、無施肥の棉栽培で数年の内に完全に地力を吸収し尽したのちには更に新しい開拓前線に大移動していく者がおおかった。1940年代、1950年代には、首都圏および新興都市における職業構造の拡大にしたがい、また成長してくる現地生まれの二世たちの学校教育を求めて、日本人間にも都市化の波が押し寄せた。殊にサンパウロ首都圏への集中度は高く、1970年代においては全日系人口の約三分の一、全都市人口の半数はこの首都圏に居住している。

もともと出稼ぎ移民であった日本人たちは金儲けと帰国の目的達成のための好条件を求めて、ごく気軽に数百キロ離れた地への大移動を頻繁に繰り返すのがむしろ一般であった。

天理教々徒たちも、もとより例外ではない。戦前には、9教会のすべてはパウルー市以北のサンパウロ州北西部高原地帯に位置していた(表2参照)。それが1958年にはサンパウロ州に位置していた16教会の四分の一の4教会がサンパウロ首都圏にあった。(というよりは、内奥地より首都圏へ移動していた。)それが1966年には大勢が逆転し、全体の大多数、すなわち28教会中17教会までが首都圏に、さらに1972年には35教会中の6割21教会が首都圏(その内19教会がサンパウロ市内)に集中するに到っていた。そしてこれら首都圏の教会のほとんどは近年内奥地より移動して来たものである。

このような急激な信者および教会の地域移動・都市化は閉鎖的な村落社会には見られないものであり、天理教の伝統的な体制との間に種々の矛盾をもたらした。

上述したように、天理教の教義を貫くものは「オヤコの理」である。オヤガミ(神)とオヤサマ(教祖)とオヤサト(教団発祥の聖地)は三位一体の理と呼ばれ、オヤとしてコたる人類全体をオヤ的愛情をもって包んでいる。オヤサマはオヤガミの化身として愛情を施し、オサズをし、コたる信者たちはオヤサマからオサズケを頂いて、オヤサマの身代りとなって異教徒たちに「ニオイガケ」をする(神の御教えを伝達する)。

天理教においては、信者のすべてが布教を行なわなければならない。「人をたすけて我が身たすかる」<sup>8)</sup>と教えられる。また、ブラジルの一教会長はいう。「オタスケしてもらって、他の人々をオタスケしないと、きっと病気になる。人をオタスケしなければならないように

表2 教会の地域分布

地域 年	サンパウロ州			そ の 他	ブラジル全国
	首 都 圏	内 奥 地	計		
1937	0	9	9	0	9
1958	4	12	16	3	19
1966	17	11	28	6	34
1972	21	14	35	8	43

備考) 1937年、1958年のデータは『天理教ブラジル伝道史』(1958年)による。1966年、1972年のものは、伝道庁内部のガリ版パンフレット『ブラジル伝道庁管内教会・布教所一覧』(1966年版、1972年版)による。

世の中はできている。」信仰に入るとは神のオタスケを、嬰兒がハハオヤの保護を受けるように受けて救われることである。《オヤコの理》はまた《タテの理》である。

教団、教会はこのような擬制親族によって家族的に結ばれている。信者Aが非信者Bに「ニオイをかける」(神の言葉を伝える)。Bに対してオヤサマに代って最初にニオイをかけたAは、Bの信仰上のオヤとなり、BはAのコとなる。一旦この関係が成立すると、それは生物学的な親子関係と同様に、人意によってはもう「切っても切れない」オヤとコとなったものとされる。この信仰上のオヤコ関係は生涯続けられなければならないとされる。

Bが信者となった場合、Bがどこに居住しようと、かれのオヤたるAの教会に属するメンバーであり、Aはオヤとしての務めとして、Bの家におけるオマツリを司祭し、コとしてのBのあらゆる世話をみななければならない。さらにBがもし他の人々にニオイをかけ、子供、つまり信者を殖やし、自ら布教所を開設するにいたれば、その布教所はAの教会の「部下」となる。Aの子供たちがそれぞれ教会を創設し、その数が増大すれば、Aの教会はこれらの教会を部下とした「大教会」に発展する<sup>9)</sup>。このようにオヤコの理はタテの理として、信者を教会系統の系譜関係の中に構造化し、権威と規律のタテ割りのヒエラルヒーに配列する。

信者は地域的に教会に属するのではなしに、信仰上のオヤコ関係・系譜関係による教会に所属する。mobilityの低い社会においては、信仰上の系譜関係は地域的な関係に大きく重なる。mobilityの高い社会ではこの両者は大きなギャップを産み、広範囲の地域に散在する信者は何らかの解決策を求めなければならない。ことにブラジルのごとき広大な国において遠距離の大移動を特徴とした日本移民間ではこの問題は切実であった。教会は信者を身近かに留めておこうと努力する。しかし事実上は経済原理が宗教原理に優先し、信者はそれぞれ遠く離れて住むようになる。近くに同じ天理教の教会があっても、オヤコの理により、信者はオヤの教会に通わねばならず、オヤはコの家のおマツリを定期的に司祭しなければならぬ。

このような状況下で、ブラジルの天理教では色々な段階における対処の仕方をして来たが、つぎにそれらの大要を示す。

### その一 同教会内の教師(後述)が代理をつとめる

毎月各信者宅で行なわなければならない月次祭に、毎回教会長が出席することは困難になる。そこで教会長は年に二三次だけ遠距離の各信者を歴訪することとし、毎月のオマツリには同教会内の有資格の教師(会長代理を許されている)のうちから比較的便宜の良い者が代理をする。初めは教会長の身内の者が代わり、しだいに一般の教師たちに向う。遠距離信者がふえると分担することにもなる。これを要するに、信者は自宅でのオマツリを、オヤによってではなしに、それに代る擬制親族上のキョーダイによって司祭してもらうことになる。

### その二 オヤの留守を試練と考える

事実上、各家におけるオマツリのために教会から司祭者の来るのが間遠になる。家庭だけの、「子ども」だけのオマツリが殖え、信仰の燈火はか細くなる。「子ども」たちはこれを「オヤの留守」の試練と考え、オヤが一時的に不在でも、本源のオヤガミ様は祀ってあるから、必ず守って下さると考える。

### その三 制度上の条件を緩和する

オサズケ人、教師、布教所、教会の数を殖やすことにより問題に対処するため、本部に依頼して条件を緩和してもらおう。オサズケ人とは十回に亘る特別の講習（ベッセキという）を受けたのち、最後に教祖あるいはその直系の後継者たる真柱にお誓いをして、人々のオサズケ（救い）をする許し（オサズケ—その証書をカリセキという—）を受けた者をいう。これを受けるには、天理市にある聖地オヤサトへ行かなければならない。これについては特に条件の緩和はないが、月に1～2回しか受講できないものを毎日2回連日聴いて時間の短縮ができる。またオサズケはふつう修養科の修了の頃に頂くのが慣例であるが、外国の者にはそれなしに授けることもおおい。教師となるには、日本のオヤサトで、3カ月間の修養科を了えたのち、15日間の検定講習を受け、教会長資格検定試験を通らなければならない。しかしブラジルから訪日して長期滞在をするのは困難であるので、次第に講師を日本から派遣して、一カ月で修養科を了えることができるようになり（1965年の教祖80年祭を機に）、やがて1972年からは現地伝道庁任命の講師で済ませるようになった。しかし、検定講習（15日の代りに21日間）、オサズケ、検定試験は元来通り日本で受けなければならない。また、布教所、教会開設にも、日本では厳しい条件がある。たとえば教師5名、オサズケ人20名、信者20～30家族いなければ教会許可はおりない。しかしブラジルの場合は、教師の資格をもつものが固い決意をもつならば、夫婦だけでも特例として許される。特にオヤ教会から遠距離（ブラジルでは1,000kmも離れていることも珍らしくない）に孤立して居住する信者の場合、みづからオサズケを頂き、教師の資格を得ると、「オヤが行けない時には、自ら会長代理としてオマツリを司祭する」ことができる。

#### その四 教会が信者のあとを追う

信者のおおくが転出して行き、教会自身があとに取り残されたような形となり、やがて信者の数のおおい地域へかれらを追いかけるように移動して行く。一般人の移動には、地方都市へ、奥地の新開拓前線へ、そして首都圏への三方向があるが、特に首都圏への移動の傾向が強く、またそこでは交通が容易である。こうして教会が信者を追いかけて、サンパウロ市へ到る場合がおおい。たとえば1966年にサンパウロ市内に在った南伯教会、プロミッソン教会、日伯教会などはそれぞれアンドラジーナ、プロミッソン、ツパンなどの内奥の地より出て来たものであった。しかし一般には、教会自体を移転させるのは、信仰上の大きな抵抗なしにはではない。なぜなら、信仰の始まった地は聖地として重要な意味をもち、信者はそこへ「帰ら」なければならないからである。人々は、ブラジルにおける天理教伝道発祥の地パウルーへ毎月一度「帰る」ことが期待されているし、信仰上の聖地、世界の中心、人類のオヤサト・先祖の地おぢばへ信者は「帰ら」ねばならない。各教会にとってもその発祥の地は重要なのであるが、「子どもたち」が四散してしまった場合、オヤはコの世界をしに移動していく。

#### その五 擬制親族・家制度の原理を拡大解釈する

状況変化によってオヤコの理の貫徹が行き詰ったとき、その拡大解釈によって適応ストラテジーを析出せしめていく。（具体的にはそのいくつかをその時折に上で述べて来た。）このためには、養子縁組、見習いなど日本の伝統的家制度の原則がその主なmodelを提供している。

ある信者Bが、その所属するA（Bのオヤ）の教会との連絡がきわめて困難であり、かつBの居住地の近くに天理教々々（Cの教会としよう）がある場合、例外的に（この点が強調される）信者Bは、そのオヤAとC教会長との話し合いのもとに、Cの元に「預けられる」ことが行なわれる。C教会がA教会と信仰上の「親戚関係」にある、つまり教会の系譜関係で同じ大教会の系統にあることが特に望ましいとされる。CはBの「親代り」として、BをAから一時的に預かり、Bの信仰上はもとより、実生活のあらゆる「面倒をみる」ことになる。Bは、AによってCの元に「見習い」に出され、「他人のめしを食って」経験を積むように言われる。しかし、けしてAとBとの元来のオヤコの関係が忘れられるわけではない。

AとBとの連絡がさらに困難となり、途絶えがちとなると、これらの「親代り」、「見習い」から更に進んで、BがCの「養子」として「もらえる」こともある。ここで新たに養父と養子の関係が生じるが、この場合でも「元の親」、「本当の親」の恩をBが忘れることは許されない。AとBとの親子関係は動かし難い事実であって、養子縁組によって解消されるものではない。事情によっては、元の親Aは、Cとの話し合いの上でBを「返して」もらうことも生じる。注目されるべきことは、Bが自ら布教活動にはげみ、自らの「子供」を大勢つくって独立の布教所・教会を開設するに至る場合、一般にはこの養子縁組の関係には終止符がうたれ、Bは戻ってAの教会所属の部下教会（布教所）に納まることである。もとの所属に戻ってもなお、「世話を受けた」「育ての親」の恩は忘れず、親密な関係を続けることが期待されている。

このような親代りや養子の関係は、あくまでも「臨時」の、あるいは「例外的」処置と考えられ、本来のオヤコの関係・タテの理が原則とされる。したがって、オヤがコの家のおマツリに年に2～3回でも通える間はなかなかおいそれとは可愛いコを「旅に出し」たり、養子にしたりはしない。ある教師はいう。「神様は各家に必ず祀られているのだから、たとえ教会がなくとも信仰が切れることはない。しかしごく手近かに天理教の教会があれば、たとえそれが他系統の教会であっても、通わないよりは良いし、通ってれば元気が出る。」すなわち、こういった対処の仕方は、少なくとも今のところ正統な解決法とは認定されてはいないらしく、単に「元気が出る」程度の処置と考えられているらしい。見習いに出すよりは、むしろ「現実のオヤが、たとえ手紙による導きによってでもいいから直接やった方がいい」と考えられ、これを具体化させる人々もあるが、長続きしないのが現状である。

本来のオヤと育てのオヤとの間に葛藤の起ることも珍らしくない。親代りや養子縁組の関係は、信者とふたりの教会長との個人的な話し合いのもとに、非公式に、日本の本部への登録を経ずに行なわれるのが一般であるから、一旦信者が日本のおぢばに帰り、オサズケを貰い、あるいは教師としての資格を得ると、「育ての親」との永い事実上の関係は無視されて、本来のオヤとの原則的な系譜関係にくり込まれることとなる。

しかし事実上は長い信仰生活の間に、信者は単に端緒としてのニオイガケを受けたオヤよりも育ててもらったオヤに強い親近感と連帯感を養い、この両者の原則の間にしばしば心理的な葛藤を産むことになる。

前述したように移民はもともと出稼ぎ人であったから兵隊や旅行者・留学生などのように一定の目標をもって海外に出ており、所期の目的を達成すれば日本の出自共同体へ「錦をかざって」帰国し、その成員に戻る考えであった。したがって政治や宗教や所属共同体はそっくりそのまま故国に置いて来たと考えていた。すなわちブラジルにおける生活にまで、

《天理教やホトケサマの話を持ち込む》ことは考えてはいなかった。それが、「業なかば」にして太平洋戦争が起り、日本官憲は移民たちを「棄民として南米の荒野に打ち棄てて」交換船で帰国してしまい、母国に見棄てられ、果ては敗戦の報によって「千年王国」のように夢に構築していた神国日本の大勝利も裏切られ、故国も喪失してアンデンティティーの谷間に彷徨した。そのような時に何らかの形で、昔日本で多少縁のあった日本宗教が導きの燈火を与えてくれ、やがてブラジルの地に子孫を養い、そこに日系人の共同体を築いて「日系ブラジル人の先祖」となるのだというアイデンティティーを培う助けをしてくれた。

このような経過を経て天理教も日本宗教のひとつとして大戦後のブラジルの日系コロニアで発展するとき、もっとも力のあったのは戦前からブラジルの地で伝道に専念していた今日の伝道庁幹部たちであった。しかしこの人々はおおくの信者たちにとって本来のオヤであるよりは育てのオヤであった。日本でニオイをかけられ、その後出稼人として永い間信仰の燈火が消えていた折、再び火をともしてくれ、人間としての再起を手伝ってくれたのは育てのオヤであった。その導きによって布教に専念するべくおぢばに帰り、オサズケを頂くと、昔の「生みのオヤ」が現われ、そのオヤの所属にくりこまれてしまう。この問題は、1966年、教祖80年祭（「出直し（死没）」後80年）に大勢が帰国団参してオサズケを頂いた折に表面化した。結局、心理的により定着している育てのオヤ（ヨコの理に基く）の教会に所属することとなった者もあるが、ほとんどはタテの理の原則どおり、本来のオヤの教会の部下教会となった。ブラジルにおける教会・信者のほとんどがブラジル伝道庁の直接の指導下に育成されて来たものであるにもかかわらず、ほとんどが数多くの大教会（在日本）に所属し、その部下教会となっているのはこのような事情による。

#### 4 むすび

日本移民たちは、異人種と異文化の支配するブラジルという社会に移り住み、その激動する社会経済構造のなかで、地域間、職業間、階層間の大きな移動を体験し、また母国の敗戦と祖国喪失意識、《ブラジル人》としての国家意識の下に親たる日本人たちに叛旗をひるがえして文化的に去り行く子弟たち、自らのアイデンティティーを求めての彷徨、人間関係の冷たい大都市生活、白人支配下の東洋人マイノリティーといった変動する新しい状況下で、それぞれに連帯と適応のストラテジーを構築してきた。同じ状況下で、ブラジルの天理教々徒たちは、タテにヨコに宗教的共同体を形成し、擬制ながらも親族的・家族的紐帯を築いて生活の方向と現世における限定づきの《陽気ぐらし》を彫り刻んできた。これらのすべては、おそらくブラジルの状況下では、上述の諸適応ストラテジー、殊に擬制親族のヨコへの拡大解釈なしには困難であったにちがいない。

ブラジル生れ・ブラジル育ちの信者、新しい世代の信者の中には、こういったオヤコの理を教会の系譜関係にまで喧しくあてはめることを納得せず、個々の信仰を重視して、天理教の教会であればどこでも近くにある教会に通えばいいだろうという考えもしいに強まりつつあるように見える。

もとより同様の問題は日本における各教会間にもあることと思われるが、この考察は筆者の今後の調査にまちたい。ただ、日本本部において1960年代初期より《よのもと会》復興を巡ってタテの理とヨコの理との論議がなされているようであり、これは直接ブラジルの天理教にも影響があり、上述の論点に直結しているので、簡単に附記しておく。

前述したように、もともと《よのもと会》は1930年（昭和5年）天理教校別科の校友会兼同窓会として発足し、その後教師をすべて会員としていたが、第2次大戦前に教師会と改名、さらに軍部政府の圧力下に婦人会・青年会をも統合して大政翼賛会式の組織に改められた。戦後、婦人会・青年会は独立して復活したが、一宇会の復興は沙汰済みとなっていた。1962年、一宇会ではなしに、よのもと会として復興されるとき主旨は、タテの理偏重主義で発展して来た天理教の体制にヨコの理を貫くことにあったという。よのもと会は原則として、用木（よふぼく）すなわちオサズケを頂いている信者の会であり、お互いに励しあう会である。教会の系譜関係が信者をタテ割に系統化して繋ぎ合わせれば、この関係はヨコ割に、地域的に連帯関係を組織するはずのものである。

「よのものを会再発足趣意書」にはつぎのように唱われている。

「真柱様は、よのもと会は『よふぼく個人個人の心の喜びを燃えたすよう、お互いにその喜びを語り合い励し合い、共に陽気ぐらしの喜びとなるよう、縦といわず、横といわず、親神様のよふぼくとして手をつなぎ合って進むこと』をするのであり、よのもと会の根本理念をお示し下さっている。

よのもと会員は、どの教会に所属しようとも、すべてはおやさとちばを中心とした道の兄弟姉妹である。単に親睦を図るだけではなく、めいめいの信仰の喜びを語り合い、励まし合う関係であって、上級とか部下という階級もない、親神様の目からご覧になった兄弟姉妹の集りである。親神様に対する子供同志、兄弟姉妹同志という心のつながりである。会員お互いが心をつなぎ合って修理肥<sup>10</sup>をするつどいである。」

ここにおいては、タテの理・オヤコの理に対して、瞭らかにヨコの理・兄弟姉妹の理が打ち出されている。ひとつの宗教集団を「親神様の目からご覧になった兄弟姉妹の集り」と把握する、すなわち religious brotherhood の視点から了解するのは、他宗教を多少とも知るわれわれにとってはあまりにも平凡なことだが、天理教の個別的・特殊の歴史からすればひとつの大きな変革であるにちがいない。兄弟姉妹の理は必ずしもオヤコの理と葛藤しなければならぬものではないが、これもブラジルにおけると同様、現実の状況変化、閉鎖的・静的農村社会から、開放的・動的工業社会への社会変動下で適応を迫られた教団の中で育てて来たひとつの戦略としての原理であると見られる。そして、これもまたブラジルの養子や親代りと同様、ひとつの擬制親族の型なのである。

日本本部でよのもと会が再建されてから3年後、1965年にはブラジルにもその下部組織「天理教よのもと会ブラジル会」が発足、1972年現在で地方別に13の支部ができています。（サンパウロ州はほぼ日本全国に匹敵する面積をもつが、ここに7支部ある。）よのもと会の精神は教会系統による区別の壁を越えて《遠縁の親戚》を《兄弟姉妹》にしよう、地域的大同団結を図ろうというものであるが、この小論においてそのメカニズムを考察したように、ブラジルではすでに早くから長い間に亘って、目前の特殊な状況と社会変動に対処して、地域的な横の助け合い運動は事実の上で汎く行なわれていたのである。しかしそれらは、天理教の根本教義と矛盾するような形ではなしに、むしろそういった教義原理の発展的な解釈と日本の伝統的な家・同族の原理の上に立って、具体的な問題解決の努力のなかから育てて来たものである。擬制親族というものは、一般に、その社会の伝統的な生活様式と物の見方にのっとって、manipulator of relationships としての人間に、それぞれの状況に応じた人間関係の選択と解釈に柔軟性のある巾を与え、社会変動に立ち向う適応戦略を提供する

ことができる。なお、表象構造（狭義の文化）としての教義には状況変化に応じた新しい解釈（たとえば兄弟姉妹の理）が比較的容易にもたらされえても、社会構造としての教会体制は一旦組織化されると容易に変容を受け入れないから、その両構造間にギャップを産み、さらに新しい調整のための適応戦略が析出されていくことだろう。

なお、天理教のオヤコの理はたしかにタテの（vertical）formal fictive kinshipであるが、階級的地位の違う二者の間に庇護奉仕の関係として結ばれるものとは基本的に異質である。この点はこの小文の中心テーマをはずれるので特に論じないこととする。

## 注

- 1) この点に関しては筆者の次の論稿がある。 *Man as Manipulator of Relationships: Network Approach in Social Anthropology*, MS.
- 2) 例えば、川島武宣『日本社会の家族的構成』日本評論社、昭和25年、pp. 3～53.
- 3) Sidney W. Mintz & Eric R. Wolf, "An Analysis of Ritual Co-parenthood (Compadrazgo)", *Southwestern Journal of Anthropology*, vol. 6, Winter, 1950.
- 4) Takashi Maeyama, "Ancestor, Emperor, and Immigrant: Religion and Group Identification of the Japanese in Rural Brazil (1908-1950)", *Journal of Interamerican Studies & World Affairs*, vol. 2, no. 2, 1972, pp. 151-182.
- 5) Ibid.
- 6) 天理教ブラジル伝道庁編『天理教ブラジル伝道史』サンパウロ州パウルー市：天理教ブラジル伝道庁、1958, p. 22.
- 7) Ibid.
- 8) 『天理教々典』天理時報社、昭和25年、p. 92.
- 9) 日本においては、50以上の部下教会ができると大教会に昇格する。ブラジルにはこの大教会の制はないし、またあったとしても昇格資格のある教会はない。すべての教会はそれぞれ在日本の大教会かブラジル伝道庁につながり（縦の系統）、と同時に全ブラジルの教会は伝道庁の統制下にある（横の系統）。たとえどれほど教会がブラジルの地で殖えても大教会制は適用されないだろうといわれるが、これは伝道庁の在り方、およびブラジルの信者間で事実上汎く行なわれているヨコの理に関係し、この小論の中心テーマに直結している。
- 10) 「心のたてなおし」をいう。「おふでさき」第9号、9番「このさきは、どんなむつかしやまひでも、みなうけよふてたすけするぞや」、10番「にんげんにやまひといふてないけれど、この世はじまりしりたものなし」、11番「このことを知らしたいからだんだんと、しゅうりやこいにいしゃくすり」に基く。天理教々義には、農民の農語（たとえば、肥）や建築用語（用木、修理、とぅりょうなど）が汎くアナロジーのもとに使用されている。

附記 この小論の基となった1966年の調査は北米合衆国 National Science Foundation 補助による研究プロジェクト「現代複合社会におけるアカルチュレーション」(GS-671. 研究代表者 John B. Cornell & Robert J. Smith) の一環として行なったものである。記して感謝の意を表す。